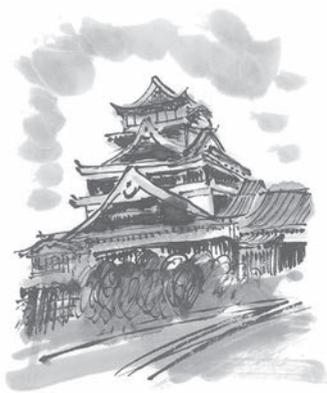


熊本城へ

テレビ画面を凝視した。思わず固唾を呑み、不覚にも、涙が出そうになっ
てしまった。

熊本城が、崩れていく。

一週間ほど前に、テレビ番組で、熊本城が放送されたばかりであった。
『火の国熊本は、水の国である』というサブタイトルで、地下水が豊富に湧きでている土地の中心部に建ち、緑に囲まれた熊本城は、実に壮観で、威風堂堂とした姿であった。
現代の日本人がこんなにも城の存在を、誇らしく、愛するようになったの



は、いつぐらいからだろうか。たぶん明治維新以降からではないかと思う。それまでは封建制の象徴で、畏怖の対象であった。そこに居る殿様は、雲の上のお人で、恐怖の対象でもあった。しかし熊本城を築城した加藤清正は、今も熊本の人たちにとって「清正公さん」であり、熊本城は、清正公さんそのものである。
加藤清正が肥後の地に、赴任して来た頃は、肥後は大洪水で、荒廃していた。その地を洪水から守る為、河川の修復を行い、田畑を広げ、城造りをした。その際に住民を人足として雇い、

給金をちゃんと払ったという。地元住民にとって、有難い殿様が、来てくださった、ということだ。

築城が完成するのには、六年の歳月がかかった。黒板張り大天守、小天守が三基、櫓が十基、とりわけカーブを描き、堅牢雄大な石垣は、入り組んだ形で造られており、侵入を難しくしている。また、城の内外には、非常用の食料として植えられた銀杏の木々、春には淡い薄黄緑色、夏に濃い緑色、秋は鮮やかな黄色に変化し、天守の黒と、よく調和している。

近代的に発展した熊本市の核となっ

永岡 慶之助
(作家)

ている熊本城は、熊本人の精神とも云えるだろう。

加藤家が二代で改易された後に、細川氏が十二代もつづき、その間、大きな改築が成されなかったことも、熊本城の姿を記憶遺産として、民衆の心に染み渡り、受け継がれた精神ではないか。

西南戦争（明治十年・一八七七年）の時に、火災により、宇土櫓のみが残った城を見た人々の気持ちは、如何ばかりか。

ここで立ち上ったのは、「清正公さん」の意志を継いだ人々で結成した「熊本城址保存会」である。昭和二年（一九二六）に、宇土櫓を修復。その後、昭和の激動の時代を経て、日本が敗戦から回復しつつあった、昭和三十五年（一九六〇）に、大小天守閣が、ひとりの篤志家成田氏が名乗りを上げ、それに賛同した多くの熊本市民の力で再建されたのは衆知のことである。

熊本城址保存会の活動は、現在も続

いており、マスキミの取材に協力したり、城内の整備など行っている。

最初の地震の揺れから二ヶ月が経った。今も尚、時々小さな揺れがあり、テレビやラジオで速報が入る。梅雨の季節になり、城だけでなく、度重なる揺れで弛んだ地盤が、崩れたり、崩れる恐れがでてきている。終息宣言はもとより、復興などという言葉さえ云えない。

僕の手元に、昭和四十八年に出版された、「熊本県人」という本がある。

著者は、京都生まれではあるが、熊本在住である。読み進めていくと、地形・気候・風土・及び歴史から育った肥後人気質を教えてくれる。その中で、明治時代、熊本の政界を代表する佐々友房が語るに、

「熊本人は、教厚、懇篤なり。方正、律義なり。謹嚴、莊重なり。質朴、檢素なり。氣骨、腕力あり。信義礼讓を守り、名節廉恥を重んじ、理論に長ぜり。虚誕ならず、輕薄ならず、

浮誇ならず、尚武の風あり。」と、長所を述べている。次に短所として、頑固偏狹、機に應ずる柔軟性の欠如、小廉曲謹、偽君子的傾向、団結心の欠如、退守的で進歩に適しない、理屈が多くて実行力がない、と続ける。

これを読むと、何故、加藤清正亡き後に、徳川が、加藤家を取り潰したのか、良く判るといふものだ。豊臣氏と因縁の深い大名に、家臣は「肥後もつこす」といわれる自我の強い人々であるから、早期に改易させ、薩摩の島津氏と手を組ませないようにし、熊本には徳川氏ゆかりの大名を配置する、という図式であった。

「肥後もつこす」この言葉のポジティブな面は、今も受け継がれているようだ。大きな災害、災難を、いく度も経てきたにもかかわらず、立ち上ってきたことを、時勢におもねることなく、愚直・頑固に、理屈なく、氣骨のある者として「清正公さん」ゆずりの精神で、熊本城を復活させて欲しい。

妙音



山本千明

(ECC英会話講師)

「うどん県それだけじゃない香川県」には、確かに特筆すべき場所、物、そして「人」が多く存在している。

津軽三味線奏者「筒井茂広」さん（四十四歳）もその中のお一人だ。

まずは驚きのプロフィール。

香川県さぬき市出身

「戦闘機のパイロット」を目指して「防衛大」へ↓二年後「環境問題」に関心を持ち「琉球大」へ。サンゴの現場調査に取り組む↓卒業後、故郷への思いが募り帰郷↓「偶然の出会い」からプロの津軽三味線奏者へ、と興味の振れ幅と行動力が半端ない。

帰郷後、県内にてたまたま立ち寄ったCDショップでたまたま手に取ったのが高橋竹山のCDだった。その時は

竹山を「たけやま」と読んでしまうほど津軽三味線のことは「何も知らない状態」だったとか。

ところが、車の中で聴いた即興曲『岩木』に全身鳥肌が立ったという。

高橋竹山（本名高橋定蔵）は青森県

生まれ。幼い頃より目が不自由で、いじめられ蔑まれていた。生きるために「門付け芸人」（人家の門口で音曲を奏して金品をもらって歩く人）角川国語辞典より）となる。それからも差別を受け続け、苦勞し続けた人生だったが、昭和三十八年、史上初の津軽三味線独奏レコードを発売し、不動の名声を得る。様々な苦悩の山を乗り越えて、日本のみならず、世界にまで「Tsugaru shamisen」の名を知らしめ、

名人と謳われつつ八十七歳で喉頭がんにより死去。

何の前知識もなく聴いた「岩木」だったが、筒井さんは初めて耳にしたその一曲の中に竹山氏の一生が深く込められていることを肌で感じ取って感動する。

そんな津軽三味線の音色と物語性に魅かれて二十六歳で自ら演奏を開始。まずは基本となる「撥打ち」（糸を一本ずつ叩く練習）を一意専心に続けた。津軽三味線には糸が三本あるのみ。ギターなどに付いているフレット（指板上にある横線で押弦の目印となる）も無い。そのため音程をとることも難しい。ただ、単純な構造であるが故に自由な表現が可能となる。

地道な練習で日々、腕を磨いていったが、「思い立ったら実行あるのみ！」の筒井さん。

演奏を始めて十年後、竹山氏の体験した「門付け」の旅を疑似体験したくなり、一月〜四月にかけて四国八十八か所歩き遍路の旅に出る。三味線一

本、寒さの中の一人旅。ひたすらに歩いて野宿する生活は、本当に辛く苦しいものだった。しかしそんな過酷な毎日だからこそ、の貴重な体験も味わえた。「高知市内で野宿する場所を探して彷徨っていたときです。真冬の夜中十二時過ぎ、パンを買いにコンビニに入りました。レジに並んでいると、僕の前に並んでいた八十歳くらいのおばあさんが話しかけてくれました。『今夜はどこに泊まるの?』どこかで野宿しようかと思っています』『わかった。私が宿をお接待させてもらおうわ』と、その人は近くのビジネスホテルまで案内してくれ、受付を済ませ、名前も名乗らずに帰って行きました。僕は久しぶりにお風呂に入り、布団で眠り、翌朝おいしい和定食を食べました。ホテルの人に尋ねてみると、そのおばあさんは近所の方で、最近お店をたたまれて、よくこのホテルに朝食を食べに来られているとのこと。

【高知のおかあさんへ】と題したお礼の手紙を書いてホテルの方に渡しま

した。見ず知らずの他人に無償の施しをできる方の存在に驚き感動しました」と語る筒井さん。道に迷っているとき助けてくれた人、食べ物や励ましの言葉をくれた人。普段の生活にはない、「人の情けで生かされている自分」に気が付かされる旅となった。

普段は、剃髪にお洒落なニット帽、パーカーにジーンズ。にこやかに、とても気さくな方である。ところが、袴姿で津軽三味線を手にした瞬間、たちまち周囲の空気までが「凜」と澄み切って張り詰める。

ライブの時には「全力で自分を出し切る」ことに集中し、常に「今日が初演で千秋楽」の思いで演奏されるそうだ。

昨年の二月、高松市内で備前焼と近江茶を展示する小粋なギャラリーをお借りして「新春津軽三味線ライブ」を開催した。アジア諸国からの留学生、など海外組十名と地元の人二十名が集い「筒井師匠」の勇壮で繊細な演奏に魅了され、会場は大きな感動と拍手に包まれる。その中には高校時代の友

人のご高齢のお母さまの笑顔もあった。

コンサートホール、お寺、老健施設、料亭、と幅広く活動されているが、これからの目標は「全国四十七都道府県、そして海外で演奏すること。地元には沢山の三味線愛好家を作ること」ただ、場所がどこであれ、思いはひとつ。筒井さんにとつて津軽三味線を弾くことは「祈り」が一つのテーマになっている。師匠いわく、「曲によって込める感情は、喜び、哀しみ、憂いなどがありますが少しでも聴く人の心が動けばよいな。とおこがましながら思っています」

前回のライブでお母様に付き添って参加していた友人が先日連絡をくれた。「母が急逝しました。病気がちで籠りがちだった母が、あの日、すごいね、すごいね、と子供のようににはしゃいで…あんなに楽しそうな母をみるのは久しぶりでした。最後の親孝行ができました」と。そして受話器の向こうから何度も何度も涙声の「ありがとう」が聞こえてきた。

与えられる偶然の出会いを楽しむ、思う



宮本富夫
(高松大学 名誉教授)

農作業に携わると、日々が新しい出会い。レンゲ畑をトラクターで耕している、アオダイシヨウとはじめて出会う。アオダイシヨウがシマヘビをのみこもうとしていたらしい。最初に目にはいったのはシマヘビの体の後ろ部分。いつもなら、スルスルと逃げだすのに、動きがほとんどない。シマヘビの頭部と体の前の部分は見えなくて、アオダイシヨウの体の一部がレンゲの草叢に見え隠れする。トラクターがすぐ近くまで近づいてもアオダイシヨウの動きはゆっくりとほんの少し動くのみ。レンゲの草叢から出てきたときには、シマヘビの姿はなく、アオダイシヨウはゆっくりと岸の草叢へ消えた。この夏はヘビとの出会いがなぜか多い。ママシともすでに二度出会う。先日はスズメ大の鳥が何羽か水田の水面近くで大騒ぎ。見るとヘビが体をくねらせ巧みに泳いでいる。水面に弧の波紋が広がる。鳥が大騒ぎすると、ヘビは動きを止め、小休止。鳥の大騒ぎが止まると、ヘビは泳ぎ始める。これ

が何度か繰り返され、ヘビはようやく向こう岸へ。鳥とヘビのやり取り、鳥の緊迫したさえずりが印象に残る。これから先もヘビとの出会いが続きそうな気配。環境に少し変化が生じつつあるのかもしれない。

はじめてダニの洗礼を受ける。しかも続けて二度。二度とも作業後にシャワーを浴びるまで気づかなかった。皮膚を這う、刺す、咬むといった感覚はまったくなし。ヒルにすいつかれたときの感覚に近い。咬まれているのに感覚がない。不思議な気がした。散歩から帰ったゴールデンレットリバーが、よく鼻の先にダニをくつつけていたこと。ダニがくつついているのに、気にしている様子がなかったことが思い出される。ダニは草などの上で吸血源となる動物が通りかかるとを待っていて、たまたま通りかかった動物にくつつくらしい。待ち伏せと咬む、吸血する感覚を感じさせない工夫、ダニの巧みな戦略の一つなのだろう。生きる術の巧みさに感心しながらも、一抹の不

安をかかえる。

足の膝裏にくつついたダニは、その昔、祖父の胸元にくつついたダニと同じ種類であった。ダニの咬みくちの周辺が腫れ赤くなっていたが、その後の痛みもかゆみもなし。血を吸ったダニは丸々と膨らんでいた。マダニの一種と推測。このダニは重症熱性血小板減少症候群（SFTS）と呼ばれるウイルスを持つ場合があるらしい。SFTSの潜伏期間は六日から二週間という。シャワーの湯をかけると、幸いなことにダニはかんたんに離れた。原因不明の発熱などが現れるのだろうか、体調を経過観察することに。

念のため、ダニを捕獲しプラスチックの容器に保管する。ダニは少しずつ体が小さくなり、気づくと産卵していた。私の血はダニの次世代誕生に貢献したようである。産卵は二度にわたって行われたらしく、少し日をおいて二つの卵塊が見つかる。容器内をあちこち移動していたダニが、なぜか卵塊のそばを離れようとしないう。自分はどん

どんやせ細りつつも卵塊のそばにいる。産卵によってエネルギーを使い果たしたのだろうか、それとも次世代となる卵を守るためなのだろうか。容器を振り、ダニを卵塊から遠ざけても、いつの間にか卵塊のそばに戻っている。ダニも親心をもちあわせているのだろうか。

トラクターを進めていて不自然なレンゲの揺れにも気づく。レンゲの茎伝いにたくみに移動する茶色の生きもの。「カヤネズミだ！」思わず心の中で叫ぶ。「生き延びていたのだ。よかった」。移動するコンバインに追われ、切断された稲わらの上を動いたり動きを止めたりを繰り返す、茶色の小さなネズミ。動くに見えるや、アツという間に上空からトビが舞い降り、さうらつていった。これがカヤネズミとの最初の出合い。

茶色のちいさなネズミがカヤネズミと知るのは何年か後。たまたま、乾紗英子さんが学生時代にまとめられた「カヤネズミから見ると自然との関

係」と題する一文を読む機会があり、このネズミがイネの葉を巧みに折り球形の巣をつくと知る。イネの葉の間に時に見つかる球状の構造物とカヤネズミが結びつき、謎が解けた。不思議を抱き続けると、ふしぎと答えが用意される。ただ感謝。我が家の水田でもカヤネズミが生息し続けている。うれし。

里山の自然は偶然の出合いを与え、楽しませてくれる。まわりの事象が偶然に生じたか、それとも必然的に生じたか、考える機会も与えてくれる。生起する事象が偶然なのか、必然なのか、学生時代から抱くテーマ。たまたまその当時読む機会を得た、ジャック・モノーさんの『偶然と必然』からヒントが与えられる。自己複製能をもつ生命体が誕生したのは偶然のできごと。生命体が偶然生じる些細な攪乱を受け入れつつ多様化の道を歩んだことは必然的なこと。それから五十年、いまだに考えはまとまらない。

アウシュビッツを生き延びたエ

ヴァ・シュロスさん、「私が生き残ったのは偶然、たまたまである」と語られる（E T V特集、二〇一六年四月）。ヒトの生死がその人がもつ価値によって決められるわけではない。生死は偶然によって決まる。私は、たまたま生き残った、という意味あいのことを語られた。才能に恵まれた兄がいたが、生き延びることはかなわなかった。

大病院で、久しぶりで出会った高一時代からの友人Y君。お互いに近況を語るなか、「人生は生きた時間の長さではないよな」と、彼の口からポツリと出る。少し不思議に感じたが、意味をたしかめることをなんとなくためらう気持ちにまかせる。何か月か後、Y君は旅立つ。生死を含めた事象でさえ、エヴァ・シュロスさんが言われるように偶然によって決まるのだろうか。

方谷先生かく行なひき 河井継之助篇



池田 一 貴

梅檀せんだんは双葉ふたばより芳かんばし、という。香木の白檀びやくだんは発芽したばかりの二葉の頃から早くも香氣を放つ、という意味で、英才は幼少の頃から優れていることの譬たとえとして用いられる。

一方、蛇へびは寸にして人を呑む、といえは、わずか一寸の小さな蛇でも人間を呑もうとする気迫がある、という意味で、同じく幼少時を褒める譬えながら、ニユアンスの違いが感じられよう。

前者の諺は山田方谷ほうこくにふさわしく、後者はその弟子・河井継之助つぎのすけにふさわしい。

方谷は文化二年（西暦一八〇五）、備中松山の国（現在の岡山県高梁市）、阿賀郡西方村に生まれた。名を球きゅう、通称を安五郎といい、幼名を阿璣ありんといった。方谷は号である。後世、備中聖人と称えられる。

文化・文政の時期（合わせて化政期ともいう）は江戸文化の爛熟期であり、比較的安定した時代だった。時代劇の映画やドラマで江戸時代が描かれるとき、たいていは化政期の風俗が基本となっている。私たちが江戸時代としてイメージするのは、ほぼ江戸後期のこの時代なのである。とはいえ政治経済は大いに動き、幕政の基盤が揺らぎはじめ、そろそろ傾く気配をみせてもいた。

そんな時期に農民の子として生を受けた方谷は、すでに満三歳にして驚くべき才能を発揮したと伝えられている。父・五郎吉も母・梶も農民とはいへ教養のある人で、村では庄屋に次ぐ長百姓。農業だけでなく菜種油を商う農商人でもあった。母が教育熱心で、すでに満二歳の頃から文字を教えはじめていたようだが、三歳になると阿璘は大きな筆で「天下太平国土安全」など多くの揮毫をしたため神社に奉納した。これらは今なお隣地（真庭市）の木山神社に残されている。

とても数え四歳（満三歳）の幼児が書いた書とは見えないので、人々は嘘だろうと噂していた。そこで母に連れられ、神社へ出向き、地元民の前で同じものを書いて見せたという。これで神童という世評が一気に広まった。まさに梅檀は双葉より芳し、そのままである。

両親はこの子を学者にするのが最もふさわしかろうと考え、満四歳になった阿璘を新見藩の藩校教授であった丸川松隠の塾に預け、教育を依頼した。ふつう満三歳、四歳といえは可愛い盛りの頑でない幼児である。そんな頃から高名な学者の弟子になったのだ。松隠も阿璘の才能に驚き、可愛がりつつも一流の教育をほどこした。

神童との評判はいっそう高まり、新見藩主の御

前で書をしたためるほどだった。現在の小学校一年生にあたる満七歳の頃には、『論語』『大学』『中庸』など四書の素読をすませ、さらに暗誦も進んでいたのだから、尋常ならざる能力だった。大人でも難渋する漢文をすらすらと読み下し、意味を理解する。並大抵のことではない。

ある日、噂を聞いて丸川塾を訪れた人物が、阿璘に質問した。「坊や、何のために学問をしているのかい？」阿璘は即座にこう答えた。「治国平天下のため」と。質問者が舌を巻いたことは言うまでもない。治国平天下とは『大学』にある言葉で、国を治め天下を平らかにすること、すなわち為政者の究極目標とするところである。百点満点の答えといつてよからう。優等生すぎて、ちょっと面白みに欠けるかもしれない。

そこへ行くと、河井継之助は天衣無縫というか天真爛漫というか、はたまた八方破れというか破天荒というか、とにかく優等生とは無縁の腕白坊主だった。

二

河井継之助は文政十年（一八二七）の正月元旦に越後長岡に生まれた。師の山田方谷より二十二歳年下である。方谷も継之助も、のちにそれぞれ

一藩国の家老格に取り立てられるが、生まれは、方谷は農商人の子（長男）、継之助は百二十石取りの武家の長男であった。いずれも通常なら家老になれる身分ではない。

継之助の読み方に二説ある。「つぎのすけ」と「つぐのすけ」である。司馬遼太郎は小説『峠』で、主人公の名を「つぐのすけ」と読ませている。しかし、地元長岡では「つぎのすけ」と呼ぶ。長岡の遊女が詠んだという都々逸からも、「つぎのすけ」のほうが正しいと思われる。

都々逸とは周知のように「七七七五」の定型で詠われる情趣たつぷりの唄である。三味線とともに色里には欠かせない。高杉晋作の作と伝えられる有名な都々逸「♪三千世界のカラスを殺し主と朝寝がしてみたい」ほどではないにしても、河井継之助の名を巧みに詠み込んだ唄は、今も粹人を使うならせる。

こんな都々逸が詠われた背景には、河井継之助の遊廓遊びがある。声も美しく、無邪気に歌い踊る継之助は色里の人気者だった。遊女らは、愉快に遊ぶ継之助を好いていたのである。

ところが藩政改革の責任者となり、改革を任されて次々と計画を実行に移した継之助は、あろうことか、長岡城下での遊廓の営業を突然禁止した

のだ。あれほど遊んでいたご当人である。もちろん、転廃業のための資金や遊女らが里帰りするための路銀などの費用補償はしっかりと用意されていた。それにしても継之助さんひどいじゃありませんか、と遊女らは皮肉を込めて不満をぶつけた。それがこの都々逸だ。

「♪河井々々と今朝まで想ひ今は愛想も継之助」
（河井は可愛いと今朝まで想っていたのに今では愛想も尽きてしまったよ）

この唄を歌えば、継之助は「つぎのすけ」だと納得するだろう。この都々逸は「♪三千世界」に次ぐ幕末の傑作といつてよい。まったく河井継之助とは何をしでかすかわからない男だった。

今泉鐸次郎が明治四十二年に著した大著『河井継之助伝』は、明治維新（北越戦争）を敗者の側から描いた貴重なドキュメントで、かつ継之助の生涯を資料や証言、取材をもとに描ききった評価の高い伝記だ（古文・漢文・候文・歴史的仮名遣いの苦手な人は安藤英男著『定本河井継之助』がよい。今泉本の要点が現代語でほぼ網羅されている）。今泉本は以後すべての継之助関係書の種本ともなっているが、そこには幼少時のエピソードも紹介されている。二つ三つ紹介しよう。

継之助は幼少時から気性が激しく、よく外で喧

嘩をした。相手が大きい子でも構わず立ち向かうので、苛められることも多かった。あるときなどは頭から血をタラタラと流しながら遊んでいたのが、妹が心配して母に告げたが、本人は平気だったという。妹が知るかぎり、継之助は悪戯してもそれを隠すことはなかった。激しいが、開けっぴろげで愉快な性格だったらしい。

十二歳ころになると父が自重するように諭し、学問、槍術、弓術、剣術、馬術などの師匠に弟子入りさせた。それぞれの流派には厳格なしきたりと作法があるのだが、従う気もあらばこそ。たとえば馬術の稽古では、継之助は馬に乗るとすぐにピシッと鞭をあて、大駆けさせる。師匠が怒って「降りさっしやい、降りさっしやい！」と叫んでも聞かない。疲れるまで乗り回したという。師匠もほとほと手を焼いた。

あとで友達が「なぜ」と訊ねると「乗馬などは駆けることと止めることさえ覚えていればよい。ほかのしきたりや約束事などはいらん」と言っただけのけたというから恐れ入る。すでに「明確な目的意識」をもち、「目的に必要なこと以外は無視・除外する」という後年の生き方が、少年継之助に具わっていたようだ。

半面、遊び好きの特徴も、この時期には芽生え

ている。継之助は美声で、俗謡（流行歌）を歌うのが得意だった。ことに夏は長岡甚句の盆踊りが大好きで、盛大な盆踊りに、変装して参加した。町衆の盆踊りには武士は参加を禁じられていたのだが、継之助は妹の浴衣を借り、顔を手拭いで隠し、終夜踊りまくったという。「母上には内緒だぞ」と妹に告げて。

書物に真剣に親しむようになったのは、数え十六歳の元服を過ぎてから。継之助の読書方法は、多読ではなく少数を精読し、これと思う書物は徹底的に書写して覚えることであつた。必要なもの以外には目もくれないのである。

謹厳実直な碩学にして実務家の山田方谷と、破天荒な利かん坊の河井継之助。この二人がいかにして子弟の契りを結び、江戸から遠く離れた備中松山で真心の交流を培ったか、なかなか興味深い。その詳細は他日を期すことにして、ここでは河井継之助を主人公とした小説『峠』に書かれた「嘘」について触れておきたい。

三

最初に断っておく。司馬遼太郎に恨みはない。ないが、事実を曲げた上で、あたかもそれが史実であつたかのごとく表現するのはいかがなものか

と思う。日露戦争における乃木希典に対する酷評もそうだったが、山田方谷に対する冷評も、巧みなだけに残念である。

ここでは『司馬遼太郎全集 第十九巻』「峠」から引用する。庭前の松の章、一九八頁より。

前章の最後に、山田方谷との別れの際、河井継之助が路上に土下座したことは書かれている。本章では、継之助が備中松山から江戸に戻り、再び久敬舎（古賀塾）に入ったときの、若い塾生・鈴木佐吉との会話から話が始まる。

「山田方谷先生とは、どのようなお方でありました」

「左様さな」

継之助は、方谷観をのべた。政治と行政の実力であるひとに及ぶひとは天下にない、と言いつつ、かつ最後に意外なことをいった。――

「すこし、人物が小さいな」

その理由は、たかだか五万石の宰相だからである、小天地は所詮はその柄にあらう人物しか育てぬ、これは方谷先生の不幸である、とあった。

「辛辣しんろうでありますな」

「これは尊敬とは別だ。たとえば蝦えびが好物

だといって好むがあまり、鯨くじらほどの大きさがあつた、とはいへぬ」

知らない人は、河井継之助が本当にこう考え、こう言ったのかと思うだろう。しかし、この部分はフィクションである。山田方谷に対する司馬遼太郎自身の考えを、河井継之助に仮託して語らせ、作り話なのだ。

なぜそう判断できるかといえば、第一に、継之助がそう語ったとか書いたとかいいう証拠（史料）が存在しないからだ。もちろん、証拠がないというだけで司馬遼太郎の話が嘘であると断定することはできない。

しかし第二に、継之助がこんなことを言うわけがない、と推定するに足る情況証拠がいくつもあつたからだ。

（その一）継之助は方谷のもとで藩政改革を学んだ後、さらに九州・四国を遊歴し、ふたたび備中に戻ったとき、ちよつど都へ遊学しようとする信原藤蔭に向かつて、こう忠告した。「天下の英雄、方谷先生に及ぶ者なし。遠く師を問うの迂をなすなかれ」と。いま天下第一の英雄は方谷先生である。他所に師を求めるといふ回り道をすべきではない、と断言したのである。

(その二) 河井継之助の妻すがの証言がある。

「河井は山田先生を神のごとく尊信し、一室に先生の書幅を掲げ、毎朝礼拝しておりました」と。継之助は神棚に手を合わせるように方谷を毎朝拝んでいたのである。妻でなければ知ることのない神聖な儀礼だったであろう。

(その三) 継之助は死の直前、長岡藩出入りの人夫請負業者の松屋吉兵衛に伝言を頼んだ。

「山田先生にお会いしたら、河井はこの場(死)に至るまで、先生の教えを守りました、と伝えてくれ」。その日、継之助は息を引き取った。享年四十二(満四十一歳)。ちなみに、小説『峠』ではこの場面は省かれ、書かれていない。

ほかにもあるが、もう十分だろう。

これほど慕い続けた先生のことを「すこし人物が小さい」などと評するだろうか。七万四千石の長岡藩の継之助が、五万石を「小天地」と見下すだろうか。蝦と鯨の譬えは上手だが、継之助はこういう陰險な月旦げつたん(人物評)をしない人である。

例えば「先生ほどの力があれば、越後屋の番頭が務まる」と評したことはあった。最大限の褒め言葉なのだ。収入と支出が決まっている藩財政などは、三都を制する大企業・三井越後屋の前代未聞の経営展開に比べれば兎戯にも等しい。継之助は

師を褒めこそすれ貶すことはなかった。

山田方谷に対する低い評価は、司馬遼太郎自身の見方であったといつて過言ではない。司馬は、龍馬や継之助のような破天荒で悲劇的な死を迎えた人物は好きだが、明晰・冷徹・苦勞人で土壇場で生き延びた優等生は嫌いだっただろう。本当の山田方谷はすこし違うのだが。

小説『峠』は、なぜ峠と題されたのか。それは継之助が敗走中に詠んだ自嘲的な句に由来する。

「八十里こしぬけ武士の越す峠」

河井は長岡藩の家老上席・軍事総督として、不本意ながらも新政府軍(軍監・岩村精一郎)と開戦の火蓋を切ることになった。北越戦争である。

後世の歴史家の誰もが、開戦前の小千谷おぢや会谈の西軍責任者が岩村のような功を焦る若造でなく、西郷か、せめて山縣ほどの人物であったら、河井の人物と器量を認めて、多大な犠牲を避け、非戦の合意が得られたかもしれない、と考えた。しかし歴史は非情だった。

『近世日本国民史』全百巻を完成した歴史家・徳富蘇峰は言う。「河井継之助は維新の三傑(西郷隆盛・大久保利通・木戸孝允)を足したより大きいとは言えないが、この三人を足して三等分したより継之助の人物は大きかった」と。

日本に三台しかないガトリング銃（機関銃）の一台をもつ長岡軍に新政府軍はてこずった。城を奪われ奪い返すという大激戦が続いた。不幸にも河井は流れ弾に当たり重傷を負う。戸板に乗せられ、越後から会津へ落ち延びる。その途中にあるのが峻険な八十里峠なのである。

河井継之助は八十里峠を越え、会津側の只見から塩沢に入った所で力尽き、歿した。

河井から最期の伝言を頼まれた松屋吉兵衛が、山田方谷に会い、顛末を報告すると「先生これを聞き慚然語らず」の状態だったという。さらに後年、遺族から碑文の撰述を頼まれたときも、ついに一行も書けず、弟子の三島中洲に任せた。方谷の悲しみは、とてつもなく深かったのだ。

「碑文を書くもはづかし死に後れ」
愛弟子の自嘲の句にも似た、自嘲の句である。

(了)



(表紙説明)

■ 総本山 善通寺

総本山善通寺「五重塔」(国の重要文化財)
善通寺のシンボル「五重塔」は、明治三十五年(一九〇二)に完成。建立費に苦慮し五十七年もの歳月を要したが、塩飽大工の手により、数々の知恵が重ねられている。

所在地／香川県善通寺市善通寺町三二一

TEL／〇八七七・六二一〇・一一一

FAX／〇八七七・六二一四・三〇二

「酒林」随筆特集 第九十二号

平成二十八年九月一日発行

発行人 西野 信也

印刷所 株式会社 太陽社

発行所 西野金陵株式会社

高松市魚井町二番地八

万一乱丁・落丁がありましたら、ご一報下さい。

西野金陵株式会社



■酒類部各事業所

- 〔本店〕
〒766-0001 香川県仲多度郡琴平町623番地 ☎0877-73-4133
- 〔高松本社〕
〒760-8544 香川県高松市亀井町2-8 ☎087-835-4133
- 〔高松支店〕
〒760-0064 香川県高松市朝日新町33-40 ☎087-851-4133
- 〔丸亀支店〕
〒763-0083 香川県丸亀市土器町北1-70 ☎0877-23-4133
- 〔徳島支店〕
〒770-0944 徳島県徳島市南昭和町3-53-4 ☎088-653-4133
- 〔松山支店〕
〒790-0925 愛媛県松山市鷹子町546-1 ☎089-975-4133
- 〔岡山支店〕
〒701-0221 岡山県岡山市南区藤田錦564-209 ☎086-296-2136
- 〔洲本支店〕
〒656-0012 兵庫県洲本市宇山3-5-28 ☎0799-22-0788
- 〔大阪営業所〕
〒565-0824 大阪府吹田市山田西2-1-14 ☎06-6877-2671
- 〔東京営業所〕
〒134-0083 東京都江戸川区中葛西4-6-12 ☎03-3686-4133
- 〔観音寺物流センター〕
〒769-1613 香川県観音寺市大野原町花稲1071-1 ☎0875-56-3133
- 〔多度津工場〕
〒764-0028 香川県仲多度郡多度津町葛原1880 ☎0877-33-4133
- 〔琴平工場〕
〒766-0001 香川県仲多度郡琴平町623番地 ☎0877-73-4133
- 〔金陵の郷〕
〒766-0001 香川県仲多度郡琴平町623番地 ☎0877-73-4133

■化学品事業部各事業所

- 〔大阪本社〕
〒541-0056 大阪府大阪市中央区久太郎町1-6-9 ☎06-6262-2444
- 〔大阪支店〕
〒541-0056 大阪府大阪市中央区久太郎町1-6-9 ☎06-6262-2447
- 〔東京支店〕
〒104-0032 東京都中央区八丁堀4-9-4 西野金陵ビル9F ☎03-3552-3427
- 〔名古屋支店〕
〒450-0002 名古屋市中村区名駅4-26-13 ちとせビル5F ☎052-561-5531
- 〔北陸営業所〕
〒918-8231 福井県福井市間屋町3-815 和中ビル1F ☎0776-24-0967
- 〔上海西野貿易有限公司〕
中国上海浦東外高橋保税区基隆路6号 ☎+86-21-6278-9548
- 〔NISHINO KINRYO (THAILAND) CO.,LTD.〕
159/40 Serm-Mitr Tower 26th Fl. Room No. 2606, Sukhumvit 21 (Asoke) Rd. Kwaeng klongtoey-Nua, Khet Wattana, Bangkok 10110 ☎+66-2-661-7014

〔PT. NISHINO KINRYO INDONESIA〕

- Sampoerna Strategic Square South Tower Level 30 Room No.6 Jl Jend. Sudirman Kav 45-46, Jakarta 12930 INDONESIA ☎+62-21-2993-0822



西野金陵株式会社
四国・琴平